



入学時期より入試改革が先だ



京大のシンボル、時計台と今年の合格発表風景(3月9日)

京大を含む12大学が「秋入学」に向けて協議会に参加すると報道されました。どのように考えていますか。

あの協議会は大学の高等教育の在り方を検討する趣旨のものとして理解しています。東大が打ち出した秋入学は、個人的には東大の濱田純一総長が大変チャレンジング(挑戦的)なことをなさったと思います。しかし、全国の大学が国際化を推進するために秋入学に移行するという論調が出ていることに対しては違和感を感じます。

京大は数年前から大学教育が抱える問題について本質的な問題を議論してきました。国際化や人材育成、就職活動早期化、入学試験などについてです。入学時期の変更は、大学改革の手法の一つにすぎません。手法だけが突出し、議論が単純化している気がします。大学教育全体に国民の目が向く効

東京大学が入学時期を秋に移行することを発表した。その是非や各界に与える影響が議論される中、京都大学は、高等教育の現在と未来をどう考えているのか。松本紘総長(69)に聞いた。

果はあるかもしれませんが、入学時期だけに限らず「秋入学」という3文字に集中して議論されていきます。これは大きな誤解を招くものです。時期をシフトするだけで魔法のように大学を巡る諸問題が解決するわけではありません。

大学入試の現状の問題点はどこにありますか。
大学受験は高校生にとって高い壁です。高校生活で青春を満喫するのでなく、受験にターゲットを絞らざるを得ない状況になっていきます。18歳人口が減少して、大学の入学定員が変わらなければ当然、壁は下がります。そうは言っても、志願者が多い大学では依然として激しい競争がある。大学の入り口で一生が決まるかのように思う親が多いことも影響しています。就職のため、社会人としての将来設計のために「いい大学」に行かせたい。最近では予備校が一大産業となつて久しく、その教育効果は確かに大きいと思います

が、それでよいのかどうか。塾は公教育を補填するものとしてスタートして、今や受験というバリアーを越えるために公教育よりも頼られるようになっていきます。高校の先生と話すと、大学入試を変えてもらわないと、高校生に身につけさせるべき知識や体験を十分に与えられないと指摘されます。

私が大学受験した半世紀前は、高校時代は普通に高校の勉強をして、課外活動に取り組んで、受験期になれば入試を受けて、合格した生徒が大学に入っていました。そのころと比べると、高校の必修科目は大きく減少しました。

昔の高校は、ほとんど全科目が必修でした。地理も日本史も世界史も物理も化学も生物も習いました。大学入試はそんなに熾烈ではなかった。高次の授業内容について一生懸命に勉強すれば十分でした。そして、幅広い知識を持った教養が身についた人を大学が受け入れて専門的な教育をしました。そのため、基盤的な力をつけた人が育った。そういう人々が今、産業界のトップなんです。彼らは国際企業としてやっていく必要に迫られています。大学を出て

くるやつを見たらどうも頼りない」と言う。それはそうでしょう。入学試験は限られた科目ですから、日本史を全然勉強しなくても大学に入れるし、極端なことを言えば、生物を履修しなくても医学部に入つて医者になれるわけです。

さらに、一生懸命に受験勉強して大学に入ったから、「やつと通つた」となります。普通、人間は100歳を全力疾走した後に「また100歳走れ」と言われたら走れません。今の学生は「入試で頑張つて勉強してきた、なんでさらにきつい勉強をしなければならぬのか」というふうになつてきているのではと心配しています。そういう環境を改善しませんか、ということをお呼びかけたいのです。

即戦力の輩出が使命とは思わぬ

学部教育についての考えは？
ヨーロッパ型とアメリカ型の大学の在り方は日本とは違います。ヨーロッパでは高校までにしつかり教養教育をやり、大学で専門的な知識を教えることになっていきます。アメリカでは高校までは人間

形成の時期で、大学4年間でリベラルアーツ(教養教育)を一生懸命やります。専門教育や研究は大学院でやります。日本はその中間です。かつては教養2年と専門2年でした。しかし、1991年に大学設置基準が大綱化され、一般教育科目、専門科目という区分ごとの履修義務が撤廃されました。ほとんどの国立大学では従来型の教養部はなくなりました。

一方、高度経済成長以降、専門的な知識が求められるようになりました。真空管からトランジスタ、IC、ナノテクへと技術はどんどん進みました。先端分野で競争が起こり、大学の専門教育に対して「深いところをカバーしてほしい」と要請が来た。すると、専門科目は2年間で足りないから、1年生、2年生でも専門の基礎を教えるようになりまし。そのため、教養を学ぶべき時間が潰れていく。産業界の方は今、「教養こそ重要だ」「世界に通用するグローバル人材を」と言われます。コミュニケーション能力があつて、日本の文化が分かり、教養もあり、ビジネスが遂行できる人材をと。現在、各界のトップの人は

努力してエグゼクティブになってきたわけです。大学までの教育で基盤的な力をつかっていたから伸びたんだと思います。大学の使命は「即戦力」を輩出することではなく、「基盤的な力、底力」を身につけた人材を社会に送り出すことだと考えています。

入学試験は依然として強固なバリアーのまま、大学1年生にはリハビリというカリラックス期間を要する。一方で就職試験の早期化によつて3年生から就職活動をしている。本当は就職活動は4年生の夏休み以降にしてほしい。日本の大学教育は、前は入試で疲弊し、後ろは就職活動で疲弊し、潰れそうになっています。各大学は何ともしなければと試行錯誤しています。秋入学という以前にそういう基本的な問題を議論するための協議会でなければならぬと、私は12大学の中では主張しています。京大の入試制度はいつごろから変わりそうですか。

入試については、センター試験、個別試験、AO試験などについて随分議論してきました。大学教育は、継続的に知の伝承をやっているわけで、明日からすぐに変

えるとはいきません。目標を定めたら、入試改革には少なくとも3年以上かかります。高校生に影響することですから。入試を通じて、自分で成長しようとする志が強い学生を選抜したい。かつては物理の試験をすれば生物もある程度で済む学生が入ってくるだろう、日本史ができる学生は世界史もできるだろうと思っていました。受験科目以外は勉強しない子が増えてますから。大学に入るためにクラブ活動のような課外活動をやめてしまいう子もいます。

さらに、偏差値だけでは測れなくなってきた。よくできる子が偏差値が高いかという、必ずしも100%の相関はない。偏差値の高い子が将来伸びるといふ保証もない。自分で考えられる学生をどうやって選抜するかを考えなきゃいけない。学力試験だけでいいのかと学内で検討しています。ある程度の基礎学力がついている学生をさらに伸ばすのが我々の仕事です。欧米では高校の課外活動とか口頭試験の結果を合否に反映させる仕組みがあります。受験教育のひずみを正し、力強い人を社

会に送り出せるように入学試験の在り方を検討します。

大学のカリキュラムを変えるには種々の要素が絡むので、1年以上かかります。高校と大学の教育の接続をどうするかを高校の先生とも話し合います。学部教育をどうするか、教養教育の在り方についてはトータルに考えて、日本社会においてどういう人材がどの段階で必要か、産業界とも話をする必要があります。

実力ある大学に人はやってくる

入学時期を秋にしたら留学生は増えるでしょうか。

例えば、学生の3分の1が留学生になるといふのは難しいのではないのでしょうか。言葉や文化のバリエーションがあります。入学時期が海外の大学と同じになったからといって、欧米諸国の多くの学生が「日本で勉強しよう」と考えるわけではありませぬ。英語だけのコースの授業を用意しても、欧米の英語でやっている教育より有利というわけではない。日本のものが学びたいという人以外は来ないでし

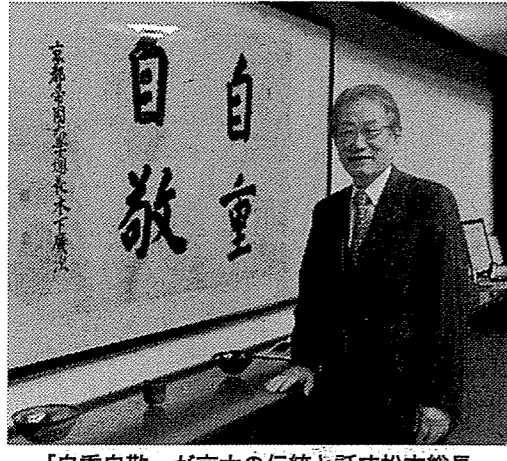
よう。優秀な学生を呼ぼうと思つたら、英語で教育するとか外国人教員を増やすというだけではダメなんです。欧米の大学が持っている優秀な何かがあれば来ませぬ。それは大学の實力です。研究レベルが米国の大学より高ければ、欧米の学生もやって来ます。

いい研究、いい教育をするという大学の基礎的な力をつけなければ、入学時期を動かしても、優秀な研究者や優秀な留学生は来ませぬ。時期を合わせると来やすくなるのは事実ですが、必要条件の一つにすぎない。これらをトータルに議論しなければ日本の大学の真の国際化は進まないと思います。京大には毎年3000人以上の外国人研究者が来ます。大学院には多くの留学生が来ています。その理由は魅力ある研究者が京大にいるからです。ただし、街は十分に国際化していません。通りの名前が漢字だけで読めない。住居にも敷金と礼金が必要。外国語ができて研究の中身が分かる専門職を用意し、外国から来た人をサポートする必要があります。感じています。

日本人学生の海外留学を増やすにはどうすればいいですか。

「日本人学生の海外留学を増やすにはどうすればいいですか。」

領域で世界のトップを走っている研究者がいっぱいいます。これは魅力的で、学生のモチベーションになる。教育に効果がある。教え込むだけではなく、本人が持つているものを引き出すことこそ教育です。研究を志す学生が挫折することもありますが。京大には多彩な研究分野があるから向かないと思えば転向できるし、いや、この分野で頑張ると思えば若い先輩から老練の先生まで多くの研究者を見ながら自分で育つていくこともできます。これは教育そのものでしょう。いい研究者をそろえるのも教育手段なのです。研究室に大学院生を預かるということは教育の責任が生じます。



「自重自敬」が京大の伝統と話す松本総長

また、学部には研究生生活に入らない学生もいます。彼らに対しても最先端の研究成果を示して刺激を与えることも必要です。学生は世界最先端の科学技術、まったく新しい哲学の考え方、歴史の新しい見方を、そこで初めて知るわけです。高校までの教科書に縛られた勉強と異なる知的刺激になります。我々はこれを「ポケットゼミ」と称して、高校を出たばかりのフレッシュマン10人くらいの少人数を単位に行っています。これはまさに研究を生かした教育です。研究と教育は分離なのです。

高校生向けのメッセージを。

「京大に来たら強烈な刺激が得られますよ」と言いたい。国際的にトップを走っている素晴らしい研究者がいる。非常にユニークな考え方、日本古来の哲学を研究している人もいます。新鮮な驚きと刺激がある大学です。京大は時代の流れにふさわげる浮草ではなく、しっかりと根の張った樹木でありたいと思つています。そのためには一人一人がしっかりとしないことが大事です。今のように入試制度で入

つてくる学生は、与えられた問題を解くのはうまい。しかし、指示しないと何もしないという傾向があると指摘されています。京大としては「自学自習」を基本にやってきました。それから、自分を重んじ自分を敬う「自重自敬」が伝統として存在し、私も自らを磨きプライドを持つ「自鍛自恃」ということを言っています。

基礎的な力をつけるために重要なのは「務本」を見つめるということ。京大は「務本」を見つめるという言葉を、根本を把握するように務めることが大事という考えです。京大は「務本」において世界のトップを目指す教育と研究をします。近年、近畿出身の学生の比率が増えています。全国に人を求めたいと思つています。京大IPS細胞研究所の山中伸弥教授が先日、東京で講演会を開いたら、非常に大勢の人が来てくれました。私も関東の高校へ出かけて講演や京大の紹介をしました。京都という文化がなす地には、東京とは違う魅力があります。京大には強烈な知的刺激、文化的刺激があります。

構成/本誌・奥村 隆

SAPIX YOZEMI GROUP

東大・京大・医学部・難関大現役合格塾

Y-SAPIX

〈新高1・2・3生/受付中〉

〈高校生コース〉 東大館(代々木)・東京校(東日本橋)・本館(新宿)・札幌南高前校・仙台広瀬通校・新潟高専前校・高崎校・大宮校・南浦和校・柏校・津田沼駅前校・池袋校・渋谷校・立川北口校・町田校・横浜校・大船校・浜松校・千種校・四条丸丸校・上本町校・梅田校・三宮校・岡山校・広島校・西小倉校・西新校・新水前寺校

<http://www.y-sapix.com> (株)日本入試センター

志望校が母校になる。

代々木ゼミナール

〈新高1・2・3、高卒生/受付中〉

本館校・札幌校・仙台校・新潟校・高崎校・大宮校・柏校・津田沼校・池袋校・立川校・町田校・横浜校・湘南キャンパス・浜松校・名古屋校・京都校・大阪校・大阪南校・神戸校・岡山校・広島校・小倉校・福岡校・熊本校・造形学校(原宿)・横浜・大阪

<http://www.yozemi.ac.jp/>